
金魚

夏猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金魚

【Nコード】

N5376N

【作者名】

夏猫

【あらすじ】

幼いころの記憶というのはどれも漠然としています。だけど、あの日のことだけは今も鮮明に思い出せる。そんな思い出があなたにもきつとあることでしょう。これはそんなお話です。

(前書き)

拙い文章ですがぜひ一読ください。

小学校5年生のころ、夏祭りの夜、屋台のおじさんが金魚をくれた。

「お譲ちゃん、金魚いるかい？」

その日、友達が三匹、四匹とつれているのに反して、運動神経の悪い私はまだ一匹も連れていなかった。

何度も失敗し、なけなしのお金を払って挑戦している私に同情してくれたのであろうか、おじさんは小さな透明のビニール袋に金魚を一匹入れると、袋の紐を縛って私に手渡してくれた。

とても嬉しかった。

家に着くと、私はすぐに金魚をほかの入れ物に移した。家には水槽がなかったので、ガラスでできた丸い透明なボウルに入れた。それでは少し味気ないと言って兄がビー玉を何個か入れた。ガラスに映える彩がいつそう涼しさを引きだした。

金魚はその愛着ある表情で、ボウルに映った私の顔をものめずらしそうに見つめている。金魚のえさがなかったため、代わりにパンくずを小さく丸め、たべさせてあげた。私が一つ一つ水槽の中に入れて入ると、金魚は口をパクパクさせて嬉しそうに食べるのだ。

7月中旬、学校は夏休みに入った。

今年はひどい猛暑で、町内のプールはどこも満員だった。高いプールの空と真つ白な入道雲を前にして、私は毎日のように学校のプールに通った。

自転車に乗って家を出ると、頬に涼しい夏の風がどこかの風鈴を鳴らしていた。この暑さの影響で、金魚の入っているボウルの水はすぐにぬるくなってしまい、日課であった水替えも日増しに母の仕事へと変わっていった。それでも私がボウルを覗くと水面に上がってきては口を開き、私の眼をじっと見つめるのだった。

そのたび、私は罪悪感というか、何か申し訳ないことをしているような、そんな気持ちにおそわれた。

その日は正午から雨だった。学校のプールへも行かなかった。母は仕事で夕方まで帰らなかったため、家には私一人だった。

家の中は薄暗かったが、雨の日はなぜかいつも落ち着いた気持ちになった。私が生まれたのが6月で、大雨の日に生まれたらしいから、何か関係があるのだろうか。

雨滴の屋根に滴る音が耳にとても心地よい。ベッドでうつうつと始めた頃、一階の鳩時計が三度鳴った。その時、ふと金魚のことを思い出した。

「こんな日くらいは私が世話をしてあげよう」。

そう思った。

きれいな水にうつしかえて、餌をあげよう。こんな単純なことをなぜ今まで疎かにしてしまったのか。

軽くなった自分の体を椅子からふっと持ち上げて、私はリビングへとかけ降りた。

テーブルの上に置いてある丸い透明なガラスボウル。水の張ったその上に、金魚が一匹浮かんでいた。

泳いではいなかった。

動いてもいなかった。

生きていないことはすぐにわかった。

死というものに触れたのは、それが初めてだった。

同時に、生せいを実感したのもそれが初めてだった。

それは数秒間まをおいて、心の奥から湧き出てきた。

私が餌をあげなかったから、

私わたしが水を替えなかったから、

面倒を見なかったから死んでしまった。

本当にそうかはわからないが、金魚はもう動かない。泳がない。

金魚は死んだ。

何で死んじゃったの。

寿命。

この暑さのせい。

やっぱり水を替えればよかった。

きちんとした水槽で飼えばよかった。

酸欠かな。

死んだのか。

仕方ないよ。

生き物はみんな死ぬ。

本にそう書いてあった。

魚も、犬も、人も。いつかはみんな死ぬんだ。

私も、

いつかは死ぬのかな。

仕方ない。

私のせいではないだろう。

いや、わたしのせいか。。。

膨大な疑念。自責。焦燥。

それらが一瞬にして溢れてきた。
考えが出なくなっても、何かを考えようとしている自分がいた。
切なかった。

寂しかった。

突然の孤独感に泣いてはいけないような気がしたが、それを止めることはできなかった。

金魚の世話はほとんど母がしていた。

私は金魚にそこまでの愛着を抱いてはいなかった。

関係も浅かったに違いない。

それでもなぜだか涙はこぼれた。

その不思議な感覚を、私はそのとき知ったのである。

雨音が強くなった。

外はもうどしゃ降りだろう。

私は金魚を手にとると、

そつと玄関のドアを開けた。

(後書き)

御精読ありがとうございました。

この小説から何かを得ていただければ幸いです。

次回作もよろしくお願いいたします。

追記

ご評価くださった方々、アドバイスなさってくれた方々に、厚く御礼申し上げます。改行のテクニックに関するご指摘から、文章構造に変化を持たせてみました。より読みやすい文章になっていれば幸いです。これからもよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5376n/>

金魚

2010年10月29日10時25分発行